

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 10 月 27 日

|        |                   |
|--------|-------------------|
| 所属部局・職 | 野生動物研究センター・博士課程学生 |
| 氏名     | 齋藤 美保             |

|  |
|--|
| <b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)  |
| 鹿児島県屋久島  |
| <b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)  |
| 屋久島実習 秋  |
| <b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)  |
| 平成 27 年 10 月 18 日 ~ 平成 27 年 10 月 24 日 (7 日間)   |
| <b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)  |
| 半谷先生 湯本先生  |
| <b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)   |
| 写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。<br>別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。   |
| 今回の実習では、シカ班に所属し、まずシカの追跡を行った。追跡中に行った作業は以下のとおりである。<br>1. フンをした個体がいれば、その個体の体高を後に推測するため、ビデオでその個体を周囲にある目印になりそうな木などととも撮影した。2. ルーラーを持った人が先ほどの個体がい場所と同じポイントに立ち、別のものが1を撮影した場所と同じ場所から撮影を行った。3. 次にフンの表面を綿棒でこすりバッファーに溶かした。4. フンを全て回収した。5. フィールドから帰ったのち、一つ一つのフンサンプルの長径と短径を計測した。6. 1個体から回収したフンサンプルから5粒を、次週行うホルモン分析用に取り分けた。7. 手順1, 2で撮影した画像をもとに各個体の前方から前足のひずめまでの長さを体高として測定した。<br>最終的にフンをした個体の体高、性、年齢とフンの大きさに関連性が見られるのか、という観点から分析を行った。<br>実習の具体的内容は以下のとおりである。<br><br>一日目：伊丹空港から屋久島空港へ、そこから宮之浦で昼食をとったのち永田の宿泊棟に移動。その後西部林道に散策に出かけ、運よくヤクジカを目にすることができた。話には聞いていたが、奈良公園などでよく見るシカとは大きさが異なり小さかった。自分自身の調査地は比較的道が平坦なであるが、屋久島は道路から見ていると非常に険しい坂が海の方まで続いておりここでの調査では私の調査地に比べきつそうだと感じた。このような環境で、キリンよりも体サイズが小さなニホンザルやヤクジカを追跡するのは慣れるまで時間がかかりそうだと感じました。<br><br>二日目：屋久島の環境に慣れるため、午前中はシカ班のメンバー全員で半山に入り、海の方を目指して移動した。起伏が激しく途中で沢や大きな岩もあり、なかなかスムーズには歩くことができなかった。途中海と山頂を両方望むことができるポイントに立ち寄り、快晴だったため非常にいい眺望だった。その後初めてシカの集団に出会ったが、個体によって人に慣れている個体と慣れていない個体の差が大きく、慣れている個体は数メートルまで近寄っても逃げないが、慣れていない個体は複数個体でも数十メートル先で警戒音を発して逃げていった。キリンでも各個体によって人への慣れ具合に違いがあるが、その違いがどのような経験に基づいて生じるのか興味を持った。(どのくらいの頻度でどの地域を中心に狩猟が行われているのかも確認する必要がある、と感じた。)<br>シカはフンをする際は白い尾を高く上げるため、フンをしている、という瞬間は非常にわかりやすいが、フンは小さくまた落ち葉が多く隠れてしまうので、見つけるまでに時間がかかった。<br>途中で親子2頭を見つけて追跡していたが、オトナよりも移動する速度が速くついていくのが精いっぱいだった。子がいると母親の警戒心が子のいないオトナよりも高くなるため、人間からより長い距離を取ろうとしているのではないかと考えた。<br><br>三日目：二日目と同じメンバーでシカの追跡を行った。昨日に比べ朝早くからシカに遭遇したが、なかなかフンをしなかった。<br>大人の個体が茂みで休んでいる光景をよく目にし、こちらが気づかずに近づいたらぱっと立ち上がって逃げる、という場面が多かった。そのような直前までじっとして茂みに潜む方法はキリンと一緒にあった。<br>シカもキリンと同様に体の側面からじっと首のあたりを見ていると反芻の様子がよく観察できた。しかし、キリンとは異なりまとまった時間を |

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

(キリンなら 30 分程度) 反芻に費やす傾向はないように思えた。それは、キリンが生息している環境ほどや屋久島は暑くないため一日中動ける、(キリンが反芻するのは日が高くなったお昼過ぎに木陰で休みながら反芻していることが多い) ためか、捕食者がいないために採食と反芻を交互に好きなように行えるためなのか、(捕食者のいる環境で反芻動物が反芻するタイミングに関して、捕食者のいない間に採食をし、あとで落ちて反芻をする、とも言われている) と疑問に思った。

四日目：学生だけで山に入ることになり、緩やかな斜面を目指して歩いているはずが、海へ辿り着き、地図だけを頼りにしていると思わぬ方向へ移動していた。海側の山肌からやっと道路にたどり着いた時に、サルとシカの集団に遭遇した。シカはサルが樹上から落とす木の実を採食しているように見えた。今日は雌雄混合の集団に加えて、オスのみの集団も観察された。バッチャーグループなのではと感じたが、シカの社会に関してあまり理解できていないため、果たしてシカがそのような社会を持つのか文献でどうか確認したい。若いオスのなかには角が片方しかない個体もあり、シカのオス同士の闘争でそうなったのか、そうだとしたら私が想像する以上に激しい戦いをしているようだ。

サンプル採取の面では、一頭がフンをしたらサンプルを取るためその場所に残る人がおり、それと同時にそれ以外の人は他のシカを追いかけることに夢中になっていた。サンプルを取り終わった後で、周りを見渡してみれば他のチームメンバーがどこに行ったかわからなくなってしまったり、体サイズと比較するためのスケールの撮影がうまくできなかつたりと、不都合が生じてくるので、そこはきちんとチーム内で意識合わせをしたい。

五日目&六日目：五日目は最終日の発表に向けてデータ分析、スライド作成をすすめた。今回の調査でわかったことは次の 2 点である。1. フンの長径および短径と体サイズの間には明確な違いがない。2. 年齢によりフンサイズが異なり(幼齢個体と成獣ではフンの長径、短径および体サイズが異なった)、年齢を同定するためにフンの大きさのパラメーターを利用できる。今後の課題として体サイズの測定法の精度を上げる、メジャーでフンの大きさを正確に測定するなど挙げられた。また、キリンだと性年齢クラスに分類する際は 3 クラスに分類するが、今回は 2 クラスだったためもう少し詳細な性年齢クラスの分類をすべきでは、という意見も出た。



写真 1：成獣雄。立派な角を持つ



写真 2：幼獣。背中に白い斑紋が見える



写真 3：人が近くにいても逃げない個体もいる

### 6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディングプログラムの援助を受けて行いました。実習期間中、ご丁寧に指導して下さった先生方、およびプログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。